

日付:2015年4月12日／聖書:使徒言行録9:1～19前半

主題:「主よ、あなたはどなたですか」

パウロの「回心」の場面として記されている。天から突然、光を放ちキリストの声が発せられる。非常に神秘的な場面として描かれているが、私たちはこういう聖書の中身をどのように読んでいくか。ともすると、神秘的なものを欲してしまう弱さが私たちにはある。こういう神秘的な体験をしなければ救われないとか、信仰が足りないとかとなる。

サウロは、ダマスコに近づいた時、突然、天からの光、天からの声を聞いた。「なぜ、私を迫害するのか」と。この答えには、イエスご自身が迫害された者として、むち打たれ、瀕死の状態でサウロの前に現れたということである。そしてイエスは、迫害される者と共にいる。小さき者、痛みを覚える者と共にいるというメッセージである。サウロは、一人で歩く事もできず、助けを借りながらダマスコの町に入る。ダマスコへ意気込んで向かっていたはずのサウロが手を引かれてしか歩くことが出来ないほどに砕かれた。それはキリストの言葉に向き合う時、傲慢な心はペしゃんにされるということではないか。サウロは、キリストの言葉、キリストの十字架に向き合うことをしたということではないかと思う。私たちもまた聖書の言葉に向き合う時、傲慢な心は砕かれるのである。

サウロは、アナニアに出会う。サウロはアナニアを通して、キリストに導かれて行く。アナニアからキリストの話を聞き、祈ってもらうことにより、バプテスマへと導かれた。私たちもまた、人を通してバプテスマへと導かれる者。その人が親、妻や夫、兄弟、知人や牧師、様々な人を通して人は導かれる。勿論、本を通してという時も、そこには人の手を通して。私もまた中学生の頃、友人に誘われて教会に導かれバプテスマを受けた。そして今がある。今、私たちがこうして教会に集められ礼拝を捧げているという導きの中に、実はどれだけ神の御配慮の中にあって、今があることか。私たちは、この使徒言行録の神秘的な書き出しの中から知らされて行きたい。私のために誰かが遣わされている。私のために誰かが祈ってくださっている。

最後に、パウロの「回心」の出来事は、パウロ自身が書いた手紙の中には一切触れられていない。ただ、パウロは「主よ、あなたはどなたですか」という問いに対する答えが、パウロの手紙には見られる。待ち望んでいたキリストが、あの十字架のイエスがそうだと気づく時の驚きはどれほどのものであったことか。十字架のイエスがキリストであるという確信がどれほどの驚きであったか。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われた者には神の力です。…神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」(Ⅰコリント1:18～25)。パウロは、「主よ、あなたはどなたですか」と問うた時、十字架のイエスこそがキリストであることに気づかされた。その時、まさに目からウロコだったのである。(神谷)